

国立大学法人お茶の水女子大学長の 業務執行の状況についての中間評価

国立大学法人お茶の水女子大学学長選考会議では、国立大学法人お茶の水女子大学学長の中間評価及び業績評価実施要項に基づき、学長が就任した日以後2年を経過した日から6月以内に在任中の業務の執行状況についての中間評価を行い、3年を経過した日から4月以内に在任中の取組により達成された実績に基づき業績評価を行うこととしている。

平成29年4月1日において、室伏きみ子学長が就任から2年を経過したことに伴い、業務執行の状況について中間評価を以下のとおり実施した。

1. 中間評価の実施

(1) 経過

平成28年6月7日 国立大学法人お茶の水女子大学学長の中間評価及び業績評価実施要項の制定

平成29年8月25日 学長のプレゼンテーション及び学長選考会議委員との意見交換

平成29年10月17日 中間評価の決定

(2) 学長のプレゼンテーション

学長選考会議は、室伏学長が自ら作成した資料に基づくプレゼンテーションを受け、その後、学長との業務執行に関する意見交換を行った。

(3) 監事の意見

内海監事及び吉武監事の連名で提出された平成27、28年度の「学長の中間評価に関する監事意見書」を確認した。

(4) 確認資料

- ・平成27事業年度に係る業務の実績及び第2期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書
- ・平成28事業年度に係る業務の実績に関する報告書

2. 評価結果

『極めて良好である』

学長として強いリーダーシップを発揮し、中期計画を順調に実施し、教育、研究、社会貢献等において十分な成果を挙げていることから、学長の業務執行状況は極めて良好であると認められる。

3. 各委員から出された主な意見

【大学運営、管理について】

- 学長就任後に所信表明で目標として掲げたこと全てに取り組んでおり、特に、教育と研究の質を保ちお茶の水女子大学の存在価値を高めるため、厳しい予算の中で大学教員の人数を維持する人事計画を策定し実行していること、また、安全なキャンパスづくりのため教職員の意識改革を進めるとともに、文京区、近隣の大学及び自治会と協力体制を構築し防災対策を進めていることは高く評価できる。特筆すべき成果として、室伏学長が学長就任以前から国の審議会への参画や民間企業の社外取締役などに就任し幅広い業種の方と交流し、その経験を通して企業経営やリスク管理の意識を大学経営にも取り入れていること、お茶の水女子大学の経済界との連携、学生のインターンシップなどに活かしていることが挙げられる。さらに、財務説明会を定期的に開催し、教職員に大学の経営という意識を根付かせることにも積極的に取り組んでいる。
- 学長就任直後から第2期中期目標・中期計画の総括及びその評価と第3期計画の策定に率先して対応している。
- 学長就任以来、強いリーダーシップにより、2年の間に、新たな教育研究拠点の形成、他大学・研究機関・企業との協定に基づく新たな取組みの推進、新型AO入試の導入、新図書館の企画と増改築に向けた準備、認定こども園の設置、クロスアポイントメントの実現、年俸制教員や若手教員採用の促進、危機管理・防災体制の整備など、大学の教育研究の向上、運営改善等に向けた新しい意欲的な取組みを次々と実現し、多くの成果を上げている。
- 教育・研究・社会貢献・ガバナンスのいずれにおいても、前執行部時代に始まった改革や取組みについて引き続き成果をあげ、現学長のもとで着手したものについても、着実に遂行していると判断する。
- 第3期中期計画期間の教員人事計画を策定し、今後の人事計画の基盤を明確にした点は非常に評価できる。
- グローバル女性リーダーの育成に取り組むという、お茶の水女子大の本来の役割（一丁目一番地の政策）を進めていることは高く評価すべき。
- 大学の防災、安全についてリーダーシップを発揮し、しっかりフォローしていることは評価できる。

【教育・研究について】

- お茶の水女子大学の特徴をうまく利用し、21世紀型の研究体制を構築されたことは評価できる。
- 博士課程教育リーディングプログラムの実施と中間評価、大学院生活工学共同専攻の設置、認定子ども園の開設、新型AO入試（フンボルト入試）を開始するなど、本学の機能強化に向けた取組みを積極的に推進している。

○応用研究のみならず、基礎研究も重視している点が確認でき、研究の多様性を維持する重要性を示した点は評価できる。

○お茶の水女子大学賞を拡充し、新たに3つの賞を創設し、女性研究者の顕章に努めていることは、研究者の資質の向上、活性化に寄与するものと考えられる。

【産官学連携について】

○産官学連携推進や財務内容の改善は学長のリーダーシップやトップセールスによるところが大きいのではないかと思われ、評価したい。

○学長就任後の1年間で非常に大型の連携が実現した。スタート段階でこんなに成果を上げられたことは素晴らしい。

○外部資金の導入実績や産・官・学との連携については高く評価できる。

○寄附金及び外部の研究資金の増加に努めている実績はすばらしい。

【今後期待する事項】

○日本の大学は国際的な存在感が極めて厳しい状況にあることから、今後は、個別的な成果に止まらずに総合的に国際的なプレゼンスを高めるという大きな柱を据えた上で、個別の課題を解決し総合力として見える形にするという立て付けにしていくことが望まれる。

○就任当初2年間の運営においては、執行部と教員との間で問題意識や現状把握に関してやや乖離が見られた。今後は、機能強化対策や相次ぐ改革・人員削減で疲弊している教員を、どのようにマネジメントし元気づけていくのかについて、具体的な対応を期待したい。

○問題意識の共有が学長（執行部）と教員間で、より進むならば教育研究組織の再編成に関して高い実際的な効果があらわれてくるのではないか。

○学長のガバナンスの強化と、「オールお茶の水」のスローガンとのバランスをうまく保って行くようお願いしたい。

○学部間（分野間）における教育研究の差異に配慮し、それらを本学の多様な特色・強みとして生かしていくことにより本学の教育研究の質を維持・向上できるよう、教員との対話にもとづく運営を期待する。

○大学の持続的発展のため、経営層（とくに女性）の育成も期待したい。

○外国の研究大学と教育の交流を進め、真のグローバル化に対応できる大学に発展してほしい（教員の支援プロジェクトで1年くらいの長期交流が望ましい）

○科研費の採択率が低下するなど、教員の研究力が低下していることが懸念される。今後の教員の研究力向上のための方策を示してもらいたい。